

度中に終え、さらにその解説文の作成作業にもとりかかって、アリストテレスの倫理思想の骨格を論じたと思う。

B01「伝承と受容(世界)」

B01-47・計画研究

仏教における主要概念のインド・中国・日本における伝承と受容

研究代表者 丘山 新
東京大学東洋文化研究所 教授

研究分担者 土田 龍太郎
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

佐古 年穂
駿河台大学現代文化学部 助教授

インド伝統思想を批判しつつ興起した仏教も、伝統思想や当時の様々な時代思潮を背景として、その思想・教理を形成していったことは明確である。しかしながら、従来の初期仏教の研究では、その伝統思想や時代思潮との関わりがあまり重視されておらず、仏教を大きなインド宗教思想史のなかに位置づけて説明するという思想史構築には十分に成功しているとは言えない。さらに紀元一世紀前後に成立してきた大乘仏教思想もまた、単に仏教思想内部での思想的展開ではなく、インド宗教思想の思想史的な大きな展開とパラレルな関係を持っていることは間違いない。しかし、この点に関して上記の初期仏教思想の研究と同様に、その説明が十分になされているとは言えない。

本研究では、まず初期仏教から大乘仏教の成立に至るまでの仏教の主要な思想概念を取り上げ、それが、背景としての当時の諸思想潮流とどのような関係を持っているかを十分に視野に入れつつ説明し、仏教思想の歴史展開をインド宗教思想史のなかに位置づけることを試みる。

また、そのような仏教の教説や主要概念がその後展開する仏教の様々な部派の註釈学的教理学の中でどのように受容されいたかを明らかにする。特に、5世紀のVasubandhu(世親)による『俱舎論』(Abhidharma-kosabhasya)は、時に経量部の立場に立ちながら、説一切有部教説を批判的に整理し組織立てたもので、サンスクリット・テキストが存在する点でも重要な論

書であり、註釈も多い。これはまた、大乘仏教においても「仏教概説」書として重用され、中国仏教十三宗、日本の南都六宗の一つである俱舎宗を生み、チベット仏教においても仏教研究の基礎として位置付けられている。

一方、「有」の批判として「空」を唱えた『般若経』の思想は、アビダルマ仏教の出家至上主義への批判と結びつき、在俗信者たる維摩詰が仏陀の弟子・菩薩に「空」を説く『維摩詰経』にその精華をみた。

インド・西域から伝来した仏典は、紀元2世紀末から漢訳されはじめ、その翻訳は12世紀の宋代まで続いた。中国にもたらされた仏典はその総てが漢字に翻訳され、中国文化圏に組み込まれることになった。それらの漢訳仏典は、現存するものだけでも1500点近くに及ぶ。しかし実際に中国人、特に教団内の出家者だけにではなく、一般の知識人あるいは民衆たちによく読まれ受容された経典は、その1乃至2パーセントに過ぎないと予測される。中国人に受容されたそれらの漢訳経典は、その時々々の時代思潮に関わるものとして受容されたと予想される。本研究では、漢訳仏典の受容を通して中国の各時代の時代思潮の特質を解明する。

丘山は、大乘仏教の代表的な経典である『維摩詰経』を採り上げ、その経典が中国でなぜ受容され歓迎されたのか、中国の各時代いかなる時代思潮に基づいて受容されたのかを明らかにする。そしてインドで仏教経典が編纂された時の本来の趣旨とのずれも対比的に明かされるであろう。また、インドで誕生した仏教思想が中国や朝鮮・日本でどの受容され、変容されたかを明確にしようという本研究は、その独自性ととも、現在国内外の各分野で議論されている東アジア諸地域における文化の受容と交流という大きな課題のなかでも重要な一翼を担うものである。

佐古は、主として『俱舎論』を取り上げる。『俱舎論』は仏教教理の研究において不可欠のものであり、就中、業品は、経量部資料としても重要であると同時に、Vasubandhuの『成業論』とならんで仏教の業思想研究の上でも様々な材料を提供する。ここで行う1)業品サンスクリット・テキスト校訂、2)Concordanceの作成、3)『順正理論』とSthiramatiの註釈との業品に関する対照表等の成果は、『俱舎論』並びにその註釈書研究、ひいてはアビダルマ仏教研究の更なる進展の為の基礎、並びに材料を提供するものである。

土田は、初期仏教及び大乘仏教の主要概念が、伝統的なヴェーダ文献や『マハーパーラタ』や『マヌ法典』をはじめとするその後のインドの主要な典籍の中でど

のような意味合で用いられているかを調査し、さらにそれらが伝承のなかにどのように受容され伝承の中でのいかに変容していったかを明らかにする。

B01-48・計画研究

ギリシア・ローマ文献の形成・伝承・受容史の研究

研究代表者 中務 哲郎
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 エリザベス・クレイク
京都大学大学院文学研究科 教授

南川 高志
京都大学大学院文学研究科 教授

研究目的

1. 本研究は、古代ギリシア・ローマの文献の形成と伝承および受容の歴史を、哲学（または科学史）・史学・文学の分野にわたって具体的に跡づけ究明することを目的とする。研究分担者はそれぞれ、古代医学の理論と実際についての希有の文書集成である「ヒポクラテス集成」、ローマ歴史文学の中でも後期に現れた混沌として特異な史書群「ヒストリア・アウグスタ」、文学の本流から外れたかに見える寓話文学、を主な研究対象として、従来の如く作品の解釈に留まらず、文字どおり大きな集成の形成に至る複雑な過程を考察し、それらが長い伝承と受容の歴史を経ていかなる現代的意義を持つかを明らかにしようとする。

2.

(1) ヒポクラテスの理論はガレノスの祖述を通して古代・中世を生き延び、19世紀の E. Littré, C. G. Kühn による全集編纂を俟って漸く正当な文献学的処理を施されたが、その後の研究は十分とはいえない。ヒポクラテスは古代医学思想の面からはもとより、ギリシア語散文の発達の間からも極めて重要な位置にあるが、文書の正確な意味は早くに忘れられたものもあり、既に1世紀からヒポクラテス用語のレキシコグラフィック的研究も始まった。医学理論と言語研究の両面からヒポクラテスの伝承史に迫る試みは世界的にもまれである。

(2) 正統の皇帝から篡奪者までの伝記を含む「ヒストリア・アウグスタ」の複雑な性格は早くから議論的であったが、多くの議論はほとんど未解決である。

作者は、執筆ないし編纂の意図は、ソースの信用度は、後世の書き換えは、といった問題の所在が、この史書の形成と伝承を研究することの意義を訴えている。注釈さえ揃わぬ、未開拓の分野に本研究で挑む。

(3) イソップの名に集約されるギリシアの寓話文学は、他の文学ジャンルと比べ、一段低いものとみなされがちであるが、メソポタミアやエジプトといった先進文明からの影響、同時代の文学作品や民衆生活に与えた感化、後世の受容、といった側面からはこれに勝る研究素材はないと言っても過言ではない。しかし、寓話の受容と変容の研究はなされても、その形成が問題とされることは希である。本研究はギリシア文学の文脈に留まらず、広く世界の口承文芸の立場からこの問題を考える。

研究計画・方法

(13年度) 11・12年度に資料の整備はかなり進んだが、「ヒポクラテス集成」「ヒストリア・アウグスタ」「イソップ寓話集」はいずれもわが国では研究者が僅少で、京都大学においても研究図書が十分ではないので、引き続き資料整備に力を注がねばならない。

クレイクの研究は「ヒポクラテス集成」の中のヒポクラテスに属する要素と集中に紛れ込んだ要素の腑分けが大きな目的となる。悲劇作品の場合には年代を確定する古代の証言や、韻律の変異を年代確定の判断基準に出来るが、「ヒポクラテス集成」の場合にはそのような指標を適用できないので、同時代の文学・哲学作品との比較が有効になる。文学・哲学に現れる医学用語が真に医学・病理学の用語なのか一般の語彙なのか、その検討を様々なテキストにおいて行う。南川は各皇帝伝に対する注解・翻訳の作業を継続して行うが、さらに、史書の性格や執筆の時代背景を探り、ほぼ同時代に書かれた群小ラテン語史書と比較しつつ、帝政ローマ期の歴史学の伝統と変容を考察する。「イソップ寓話集」の伝承については、他の文学ジャンルと同じような判断を行うわけには行かないことが中務のこれまでの研究でもますます明らかになった。寓話の伝承は主に口承でなされ、写本から筆写を行う場合でも、通常の文学作品より遙かに自由に書換えがなされたからである。そこで、中務は寓話が他の文芸諸ジャンルに引用されることで文脈との関わりが生じ、新たな意味を獲得していく過程を各寓話に即して考察する。

(14年度) 3つの集成は共に古代においても特異な性格をもつものであった。それ故、この年度には各人がそれぞれの研究をまとめると共に、他の古典文献の伝承と受容史との比較において、我々の研究がもつ意味を相互に議論する。

**ユースティニアヌス帝「学説彙纂」研究
元首政期法学著作の伝承と変容**

研究代表者 西村 重雄
九州大学大学院法学研究院 教授

研究分担者 児玉 寛
九州大学大学院法学研究院 教授

研究目的

1) 本研究は、元首政期法学著作が3世紀後のユースティニアヌス帝「学説彙纂」に収録された際に受けた受容、および、ビザンツ期、西欧中世、近世ローマ法学およびパンデクテン法学が蒙った理解の変更を明らかにすることを目的とする。

2) パンデクテン法学の強い影響にある従来の古典期ローマ法学とは異なる弾力的、試行錯誤の中で生成する姿を示し、現代法思考の反省の契機を作ることが予想しうる。

3) 欧州の学界でも目指されてはいるが未だ十分には達せられておらず、ローマ法的伝統の軽いアジアの視点が重要である。

4) 2つの総合(A)の科学研究(「バリシカ法典」「ローマ法の日本民法への影響」)および2つのローマ法・民法国際シンポジウム(1991・1998)の組織・開催を経て準備・企画した。

研究計画・方法

関連文献の一層の収集、重要写体の入手分析を行うと同時に、法資料の厳密・正確な理解を共同分担者(児玉教授)と精力的に行う。この成果を国内のローマ法研究会に掲示すると共にドウ・ヴィシャー古代法史協会(S. I. H. D. A)国際会議において逐次報告し批判を仰ぐ。

**ビザンツ帝国と古典継承・創造活動
マケドニア朝期の古典再生とその歴史的意義**

研究代表者 大月 康弘
一橋大学大学院経済学研究科 助教授

研究分担者 渡辺 金一
一橋大学 名誉教授

本研究計画は、10～11世紀のビザンツ帝国で作成された文書について分析・研究している。とりわけ、国家生活に関わる古典的公文書(勅法・財政文書)や歴史記述に即して調査を遂行中である。当該期は、同帝国の歴史を通じて文化活動が活発化した時期であった。後代「マケドニア・ルネサンス」と呼ばれるこの時期は、多くのギリシア語文献が再生・創造されたことで知られるが、本研究計画では、その文化活動の実態を、個別の古典史料の作成事情調査、テキスト分析を通じて研究している。

現段階における作業の状況等はおよそ以下の通りである。

(1) 国家生活に関わる古典文書について、作品の作者、内容、成立の契機、写本状況について調査し、要録を作成中である。この作業の中で、ビザンツの古典制作が、文体や記述内容の点で常に既存の古典作品に範を求めていることが注目された。彼らの「文学」活動は、それ自体「古典の再生」という側面を伴っていた。

(2) 日本語訳の作成。注目すべき作品(行財政文書、外交文書を含む)について、写本伝承を顧慮しながら、日本語訳の準備に着手している。各用語の意味範囲の確定、適切な訳語の選定について、本計画でも苦労している。

(3) ビザンツ帝国で作成・創造された広義の文学作品は、ギリシア・ローマ文明の継承の上に、キリスト教的世界観に規定されて独自の思想世界を出現させた。この社会はギリシア語を公用語としたが、そこは、ギリシア語を母語とするいわゆる「ギリシア人」ばかりでなく、アルメニア、グルジアなど早くからキリスト教を受容した近隣諸族、またスラブ諸族もがともに生活を営む世界だった。つまりこの社会は、ギリシア語を公用語としながら、多民族・多文化を包含する「世界帝国」だった。その文学活動は「民族主義的」「国民主義的」な活動ではなく、ビザンツ古典には、より普遍的な価値・目的が含意されていたと観察された。

その中核には、諸民族、諸文化を統合する「神の摂理」Oikonomiaの観念があったと考えられる。

(4) コンスタンティノス7世ポリフュロゲネトス帝(在位913-959年)が編纂させた『帝国の統治について』De Administrando Imperio、『儀礼について』De Ceremoniis、『テーマについて』De Thematibus、『続テオファネス年代記』Theophanes Continuatusをはじめ、国家活動のための公文書など、いずれのビザンツ古典にも、キリスト教の「神の摂理」がこの世界を支配する、との独特の「世界秩序」像が垣間見られた。その彫琢、深化こそが、当時の彼らの「使命」であったとすら見える。この世界秩序観は、徴税実務のための文書にも認められた。

(5) 世界観の抽出、またラテン語史料との連関。ビザンツの古典作品は、自らの国家形象および「皇帝」を「世界」の中心と認識していた。同帝国の古典作品には、普遍的世界観が看取される。しかし、この事態を正確に把握するためには、ビザンツ古典からのみでは、その世界観を十全に把握できないことが了解された。本研究計画は、「中世キリスト教世界」に固有の世界像を定位する必要に想到し、西欧ラテン史料をも視野に入れながら作業を展開している。年代記、外交使節記等について、ラテン文献へのビザンツ古典の影響如何の問題も、テキスト文体・記述内容の点から考察中である。

B01-51・公募研究

『資治通鑑』テキストの受容と改編

研究代表者 中砂 明德
京都大学大学院文学研究科 助教授

北宋の司馬光が中心となって編んだ『資治通鑑』は、司馬遷の『史記』と並ぶ中国史書の代表作だが、『史記』の名声に比べると、どうしても地味に映る。しかし、過去においては『史記』より遥かに大きな影響力を持っていた。それは、『通鑑』単独の力というより、『通鑑』から生まれた「一族」の総体の力による。

浩瀚な著作である『通鑑』には、多くのダイジェストが生まれた。南宋の朱子とその弟子たちが編んだ『通鑑綱目』が、親を上回る「聖典」の位置を獲得してゆく一方で、同時代に作られた種々の「通鑑詳節」は科挙の受験参考書として、卑俗ゆえにより実戦的に読ま

れ、その子孫にあたる「節要」、そして『通鑑』と『綱目』の野合によって生まれた「綱鑑」は明代後期出版界のヒット商品となった。

これらのダイジェスト本こそが実際には近世中国人の歴史意識を形づくってきたことは既に指摘されている。また、「綱鑑」は明代に生まれた歴史小説の枠組みを提供する役割を果たしたことから、文学研究者の注目を近年集めている。しかし、史学史の立場から「通鑑一族」の遺伝形質とその繁殖力を測定する作業がまだ残っている。戦国～五代の1362年の歴史を扱う『通鑑』の前後に待する『通鑑外紀』『通鑑前編』『通鑑続編』あるいは『綱目』の姉妹作『綱目前編』『続綱目』や、それらの変形テキストの総体的な把握もなされていない。

本研究は、「通鑑一族」の中で庶子系に属する種々の「節要」「綱鑑」を中心に据えて、『通鑑』『綱目』との距離を実測するとともに、相互の精細な比較を行って、テキストの受容と改編の歴史を洗い直すことを目的とする。初年度は「節要」「綱鑑」諸本をできうる限り収集して検討を加え、次年度は比較の材料として、正史系ダイジェスト(代表例が『十八史略』『十九史略』)や、科挙用のテキストに選ばれた『春秋』胡安国伝を中心とする春秋注解本の検討を行なう予定である。そして、従来の学術的史学史から抜け落ちた部分を掘り上げることを目指し、合わせて史書と出版・科挙の力学的関係を解明したい。

「節要」は李氏朝鮮やヴェトナムで翻刻され、「綱鑑」は数多く日本に輸入されて江戸期に和刻も行なわれるなど、中国の外にまでテキストは散布されている。盤古以来の中国通史を提供する形となった「綱鑑」は、イェズス会士たちの中国史把握(マルティニ『シナ史十巻書』、ド・マイヤ『通鑑綱目』訳)にも影響を与えている。こうした横への広がりを射程に収めることも目標としている。

以上の作業を通して、「通鑑一族の繁衍」を柱とした近世中国史学史を描きだすことが最終課題である。

シャーンティデーヴァ作『入菩薩行論』の伝承と変容

研究代表者 斎藤 明
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究計画の概要

本研究は、後期インド仏教史、および10世紀後半以降の後伝期のチベット仏教史に多大な足跡を残したシャーンティデーヴァの著『入菩薩行論』をめぐって、その伝承と変容の過程を精査することを目的としている。

研究代表者はすでに、『入菩薩行論』*Bodhisattvacaryāvātāra*の原形に近いと推定される異本のチベット語訳本(9章本・7025偈)を、敦煌出土のチベット語写本の中に発見し、1986年以降、この敦煌本と現行本(10章本・913偈)とを比較考察する研究を行ってきた。敦煌本を用いた研究は、その後内外の研究者の注目を集め、近年では関連する諸研究が着実に積み上げられてきている。これらの研究は、『入菩薩行論』の新旧の断層とその背景を解明しつつあるばかりでなく、後期インド仏教史および後伝期のチベット仏教史におけるシャーンティデーヴァ像そのものの見直しをも迫りつつあるのが現状である。

本研究は、研究代表者をふくむ内外の研究者によって遂行されてきた以上の研究をふまえたうえで、以下の5つの研究課題の遂行を企図している。

- (1) スタインおよびペリオ収集の実写本にもとづき、9章本全体のテキストおよび訳注作業を完成させる。
- (2) タボ寺写本のローマ字化テキストの作成とあわせ、ダルマパーラ作・ディーパンカラシュリージュニャーナ等訳の『入菩薩行論要目』『同三十六要目』の校訂テキストを作成したうえで、「[11]要目」および「[36要目]」の意味を解明する。
- (3) 9章本と10章本という2つの伝承の背景を、前者に対する現存する唯一の注釈『入菩薩行論解説[細疏]』(著者不明)をも参照して解明する。
- (4) アクシャヤマティ(9章本)とシャーンティデーヴァ(10章本)という、両本の著者名の相違が意味するところを考察する。
- (5) シャーンティデーヴァ作の他の主要論書である『学処集成』*Sikṣāsamuccaya*と『入菩薩(菩提)行論』との関係を再考し、両書の成立経緯を明らかにすると

ともに、後期インド仏教史、および後伝期のチベット仏教史におけるシャーンティデーヴァの位置づけを再検討する。

インド大乘仏教瑜伽行派における「摂事分」の伝承と変容

研究代表者 早島 理
滋賀医科大学哲学研究室 教授

研究目的

- (1) インド大乘仏教瑜伽行派が、あまたの聖典(アーガマ)から自派の典拠となる経典を取捨選択しつつ、それらに改変・変容を加えながら自派の思想を確立していった過程を追求する。
- (2) 同学派にとっての根本聖典(経・律)は「事vastu」と称され、その集積が「摂事分」である。この学派が自学派思想形成のために、多くの聖典から取捨選択しつつ、それらに変容を加えることにより、現在伝承されている「摂事分」を如何様に形成したのかを考察する。
- (3) この学派の雑阿含経典を中心とする聖典は、『瑜伽師地論』『摂事分』、『顕揚聖教論』『摂事品』などに伝えられている。その継承の過程で加えられた変容内容を詳細に検討し、その変容が聖典そのものに新たな価値を付加し、聖典を蘇らせた役割を明確にする。

研究計画・方法

- (1) この研究目的を達成するために、次の典拠校訂を行い、データベース化する。
 - ① 『瑜伽師地論』『摂事分』に継承された個々の阿含経のパーリ語・漢訳の対照校訂版を作成する。
 - ② アーガマを継承したであろう『瑜伽師地論』『摂事分』の関連箇所チベット訳・漢訳の対照校訂版を作成する。
 - ③ 『瑜伽師地論』『摂事分』と『顕揚聖教論』『摂事品』との対照校訂版を作成する。特に『顕揚聖教論』については、大正大蔵経版、高麗大蔵経版、中華大蔵経版に併せて、蔵要版、平楽寺版、慧路居士断句版を照合する。
- (2) 作成されたデータベースを活用し、阿含聖典(特に雑阿含経典)・『瑜伽論』『摂事分』・『顕揚論』『摂事品』の資料対照一覧を作成して三者間の異同を確認し、

聖典変容の流れを鳥瞰する。

(3) 瑜伽行学派があえて聖典を変容して受容した意図を追求し、この変容がこの学派の教義形成に与えた影響について考察する。

特に、三性説の形成過程、瞑想を中心とした修行道階梯の変容を中心に考察を重ねる。

(4) 以上の成果に基づき、『顕揚聖教論』第一章「撰事品」、及び第八章「現観品」の解説研究を完成し公刊する。後者の解説研究は瞑想を中心とした新たな修行道階梯の構築を解明するものとして重要である。

B01-54・公募研究

古ジャワ世界における『マハーバーラタ』の倫理観の伝承と受容

研究代表者 安藤 充
愛知学院大学文学部 教授

研究の概要

本研究は、古典インドの二大叙事詩の一つである『マハーバーラタ』が古ジャワ世界に受容されるプロセスにおいて、叙事詩の枠物語中に織り込まれているヒンドゥーの倫理観がどのように伝承、受容されたかを、文献学的に解明することを目的とする。

ジャワでは紀元後9世紀以降、ヒンドゥー文化の影響を強く受け、好んでヒンドゥー的な王権支配体制を取り入れた王家の宮廷を中心に、ヒンドゥー色の濃い独自の古ジャワ文化を発展させた。サンスクリット文学の精髓ともいえる『マハーバーラタ』の翻案は、古ジャワ文学史上でも重要な位置を占め、全18巻のうち9巻については古ジャワ語散文翻案(パルワ)が現存し、また、さらにそれらの翻案をもとにしたインド韻律の詩作品(カカウイン)も少なからず伝えられている。一方、『マハーバーラタ』のいたるところで主要登場人物によって論じられるヒンドゥー教的倫理観、特に王や戦士などそれぞれの立場に応じた義務(ダルマ)や身の処し方(ニーティ)も、古ジャワ版の金言・格言集に断片的ながら大量に引用されているのが特徴的である。

このように、古ジャワ宗教文化史上きわめて重要な意味をもつ『マハーバーラタ』であるが、サンスクリット原典との比較研究は、世界的にもまだまだ研究の端緒についたばかりの段階にある。これは旧来の研究

分野の制約、つまり、インド学とインドネシア研究の狭間にあつて、どちらからもその重要性が正しく認識されてこなかったことによるものといえる。近年、インド原典に照らして古ジャワテキストを正しく読み解き直すという方法論がようやく認知されつつあり、本研究もそれと同様の立場に立つ。すなわち、ヒンドゥーの倫理観が古ジャワ世界にどのように受容されたかを、古ジャワ文献とサンスクリット原典を綿密に比較対照させて分析する。

従来の研究は、断片的なサンスクリット引用詩節のみを恣意的に抽出して比較するだけにとどまっており、「古典インドの伝統の無理解による変容」といった偏見を脱することができなかった。しかし、少なくとも『マハーバーラタ』の枠物語に関しては、古ジャワ語翻案作品はかなり原典に忠実であることが、これまでの筆者の研究によって徐々に明らかにされてきた。

本研究では、2年間という期間の制約上、『マハーバーラタ』に描かれるヒンドゥーの倫理観の古ジャワ的受容に関して、(1)インドのヒンドゥー教徒に最も親しまれる『バガヴァッドギーター』が古ジャワ世界にどのように伝承、受容されたか、(2)『マハーバーラタ』由来の教訓的詩節が、いかなるプロセスでいかなる改変をうけて、古ジャワの金言集におさめられることになったのか、の2点に焦点を絞る。具体的にはそれぞれ次のような目的と意義をもつ。

●『マハーバーラタ』第6巻に含まれる『バガヴァッドギーター』は戦士の本務、神の信愛を説き、ヒンドゥー教徒にとっては聖典であるが、古ジャワ版には全700詩節のうち80のサンスクリット詩節が残るのみであり、古ジャワ世界におけるヒンドゥー教の地位から考えると特異なこととみられてきた。これまでサンスクリット引用詩節のみ取り上げて、深遠な教えが古ジャワ訳者にじゅうぶん理解されなかった故と片付けられてきたが、古ジャワ語版全体の文脈を丁寧に読解し、サンスクリット原典およびその複数の異伝承とも比較対照させる。これにより、『バガヴァッドギーター』の説く倫理観がどのように古ジャワ世界に受容されたかが初めて明らかにされるとともに、インドからジャワへの伝承の系統の解明にも光をあてるものと期待される。

●古ジャワ語金言集『サーラ・サムッチャヤ』は約500詩節のうち7割ほどが『マハーバーラタ』由来とみられている。ただし、インド、ジャワ双方においてこれらの教訓的な詩節は複数の典拠をもち、伝承の過程を探るのは難しいとされてきた。本研究では、サンスクリット引用詩節の原典およびその異伝承との比較対

照, および古ジャワ語翻訳・解説部分の読解により, これらの金言の古ジャワへの伝承と受容の特徴を解明する。

B01-55・公募研究

ギリシア・ローマ古典文学における神託の概念と機能の変容

研究代表者 小川 正廣
名古屋大学大学院文学研究科 教授

研究目的

神的意志や人的・自然的動向を認知あるいは予知するための神託(oracle) 広義には占い(divination)

は, 現代と比較して情報の限定された古代社会に生きた人々の知恵の結晶であり, 一般にどの古代文明の実態を解明するうえでもきわめて重要な要素である。しかし, 従来のギリシア・ローマ研究においては, それは主に歴史学や宗教学に付随する小領域として扱われており, きわめて多数存在する神託と占いに関する文学的記述を丹念に分析・検討して, 総合的に解明する試みが, いまだ国内外を問わず十分にはなされていない。

本研究は, ギリシア・ローマ世界における種々の神託の成立と変遷について, これまで考古学的調査や歴史的事象の史料分析に傾きがちであった結果, 十分には考慮されていない文学的古典文献の中の豊富な事例に着目し, そうした古典作品の生き生きとした多くの記述の考察をとおして, 古典古代の人間の精神生活の中に深く浸透した神託の宗教的概念の形成と変容, および個と集団に関わるその超自然的な知の技術の実相と機能的変化を明らかにすることを目的とする。

研究計画・方法

以上の目的を達成するために, まずギリシア文学を対象として考察する。その際最も重要な作品は, 最古の作家ホメロスの二大叙事詩, 古典期の悲劇・喜劇およびヘロドトスの説話文学である。これらの古典をとおして, そもそも神託がいかなるものであり, それが人間と社会にとってどんな価値を有し, またそれが実際どのように行なわれていたのかを, 時代を追って詳しく探る。また, こうしたギリシアの代表的古典作品には, 比較的解釈者の介入の余地が大きかった火・水・籤・動物・内臓などによる「帰納的占い」ととも

に, より直接的で純粋な神的啓示である憑依・死霊・夢による「直観的占い」の事例もふんだんに見出される。とくにデルポイでの巫女による憑依占い, エピキュラなどでの死霊占い(ネクロマンティア), エピダウロスなどでの夢療法は, 特殊なゆえに歴史・考古学的資料では不明な点が多く, 古典作品中の類似の諸事例を十分に検討せねばならない。そうした特殊な神託・占いが, 個々の文学作品の中でどのように使い分けられていて, どのような言語表象をともなっているか, また劇文学などの場合(例えばアイスキュロス作『アガメムノン』中のカッサンドラ狂乱の場面)いかなる演出がなされたかなどの点について考える。

次に, ラテン文学を対象として, ローマ時代における神託の在り方と役割の変容を探る。ローマでは, ギリシアで成立・発達した種々の神託と占い以外にも, エトルリアに起源する独特な占い(腸占い)が取り入れられた。しかし, そうした種々の神託を, ローマ人は無批判的に受容したわけではなく, 彼ら独自の世界観・社会観に適合させる仕方で継承した。とくにローマ人の神託に関して重視すべき点は, 彼らが神託のみならずあらゆる予兆を神の意思の表われとして尊重し, 公私においてきわめて積極的に利用したことである。ローマ建国にまつわる諸伝説や共和政時代の歴史伝承は, そのことを示す多くの事例を提供している。神託のそうしたローマの変容の過程について, 共和政時代の文学ではプラウトゥスの喜劇, リウィウスの建国史, キケロの宗教論, ウェルギリウスの叙事詩などを対象として考察する。さらに帝政時代の神託については, セネカの悲劇とルカヌスの叙事詩が重要な情報を提供している。

B01-56・公募研究

ラテン文学におけるギリシア神話の受容と継承 叙述技法から見た研究

研究代表者 高橋 宏幸
京都大学大学院文学研究科 助教授

西洋古代にあって, ギリシアとローマが築き上げた文化伝統は古典古代として総称されるが, ギリシア神話はこの古典古代という伝統の同一性, 継続性にきわめて大きく関与した。すなわち, 民族性, 宗教性, 歴史あるいは地理的相違を越え, ローマがギリシアの精

神世界を取り込んでいく過程で、ギリシア神話はきわめて重要な役割を担っている。本研究はそうしたローマでのギリシア神話の受容と継承を文学表現、とりわけ、ギリシア神話を語り聞かせる叙述技法の面から観察し、その特質を明らかにしようとする。

叙述技法に着目する理由はギリシア神話を語り伝える構造にある。地上の人間は天上の神々や英雄が活躍した遠い過去といった神話世界に直接接触することはできないために、技芸の女神ムーサが媒介者となり、歌人や詩人に靈感を与え、これを詩人は人間の言葉に移して聴衆に伝える。ここには、「伝承」と、伝承のための「媒介」に対する強い意識、言い換えれば、「語ること」そのものへの自覚が現れている。ムーサの存在は、一方で伝承の媒介者として、伝承が技術、つまり、神的飛躍ではなく人間的、継続的営為であることを象徴しながら、同時に、媒介というそれ自体は媒介されるものに付随的とも思われる機能を神格化している点で、伝承そのものの、言ってみれば、普遍的側面に光を当てている。この構造はギリシアからローマへ受け継がれ、その継承の過程で、伝承の技術についての自覚はいつそう強まる。

本研究は、「古典学の再構築」の前期、平成11～12年度にも同課題で公募研究を実施し、これを引き継いでいる。前期には、キケロー、リーウィウス、ウェルギリウス、オウィディウスなどの作家を取り上げ、個別の叙述技法として、照応、カタログス、エクブラシス、retardation、forcalizationなどに考及したが、本年度よりの二年間では、そうしたさまざまなジャンルの作家に現れる神話の扱われ方、語られ方に広く目配りするとともに、作品により深く即した考察対象としてウェルギリウス『アエネーイス』とオウィディウス『変身物語』を主要なテキストとする。『アエネーイス』については、これまで、本年四月に邦訳（岡道男と共訳）を刊行、作品後半に描かれる「苦難」を扱った論文（「古典学の再構築」平成11～12年度公募研究成果集）を発表した。これらをも踏まえ、アエネーアスやトゥルヌスなどの英雄、ユピテルやユーノなどの神々についての描き方に焦点を当てる。『変身物語』について研究者はこれまでに数編の論文を公表して、それらにおいても作品のメタ文学的性格に論及してきたが、その方向を保持しながら、とくに、『アエネーイス』、および、ローマ恋愛詩との関連に留意して考察を進める。

研究代表者 西村 賀子
名古屋経済大学法学部 教授

研究分担者 川津 雅江
名古屋経済大学法学部 助教授

（１）本研究の目的と意義

- ① 本研究の目的は、西洋古典と女性の関係をジェンダー（社会的・文化的性差）の視点から解明することである。西洋の古典はヨーロッパ文化の様々な領域と局面のなかで権威ある規範として、少なくともルネサンス以降、通時代的に作用してきた。女性イメージ構築の面でも中世、ルネサンス、近代を通してジェンダー形成の規範的言説の根拠となったのは、古典文献に表象された女性像であった。本研究が目指すことは、ヨーロッパ文化形成の基盤となった西洋古典がまず古代にどのような社会的文脈に依存しつつジェンダーを形成・確立したか、次いで後世はそれをどのように解釈し利用することによってジェンダーを拡大したかを明らかにすることである。このような目的を達成するために用いる資料は、古代の文学・哲学・歴史・医学・神学（とくに初期教父の著作）などの文献テキストである。さらに近代に関しては、近代文学とくに18世紀末のイギリス文学に古典世界がどのような作用を及ぼしたかという問題を精緻な作品分析によって検証する。
- ② ジェンダー視点による研究はわが国でも古典以外の分野、たとえば歴史学、社会学、心理学、美術史、国文学、ヨーロッパおよびアメリカの近代・現代文学などでは相当の成果をあげている。一方、欧米の古典研究先進国では早くも1980年代からジェンダー視点を採用した論文・著作が発表され、今日では学会の一つの潮流をなしているといつてよい。それに対して、日本における西洋古典研究では、この分野に少数の女性研究者しかいないという事情もあって、ジェンダー視点を伴う研究はまだほとんどない。また近代文学については、18世紀英文学のフェミニズム批評はあっても、それを古典と関連させながら包括的に論じた研究はまだ現われていない。わが国におけるこのような研究の現状を鑑みるならば、「古典と女性」をテーマにジェンダー視点に立脚した本研究はきわめて画期的な試みであると言えよう。

（２）研究計画・方法

- ① 平成13年度の計画

主要設備との関連では今年度は、本研究に関連する内外の基本的資料・文献・定期刊行物などを精力的に収集し、研究基盤の確立を主眼に置く。とくに古典研究に不可欠の基本的な資料である Real-Encyclopadie der Klassischen Altertumswissenschaft CD ROM (パウリ・ヴィソワ古典・古代学大辞典 CD ROM 版) を今回の科学研究費によって購入する予定である。次に、研究計画内容を具体的に述べると、研究代表者西村は平成11～12年度の研究成果として、ジェンダー視点からアリストテレス『政治学』を読み直す試みを行った。そこで今年度は、古代における女性の社会的地位や心性形成に大きな影響を及ぼしたと考えられる生殖や身体の問題をテーマに、アリストテレスの『動物発生論』とその受容などを研究する予定である。また研究分担者川津は18・19世紀イギリス文学のなかに自らをサッポー（前6世紀ギリシアの女性詩人）に擬して作詩を試みる流行があったことに着目し、この現象を分析する予定である。

② 平成14年度の研究計画

平成14年度に関しては、前年に収集した基本的資料・文献・刊行物をより一層充実させるとともに、最新の研究動向・研究成果を含む資料・文献・刊行物などを追加し、本研究を継続しつつそのレベル・アップを図る。さらに本研究の成果を論文・著書・口頭発表などの形で公開することによって、研究成果を社会的に還元する予定である。

(3) 研究業績

本研究に関連する過去5年間の主な研究業績には次のものがある。

(1) 西村 賀子

- ① 西洋古典文学における魔女の原型（下）
名古屋経済大学・市邨学園短大人文学研究会「人文科学論集」第66号，pp 53 - 66 .
(2000年9月)
- ② ヨーロッパにおける古典の伝承
文部省科学研究費補助金特定領域研究「古的学の再構築」総括班編『古典学の現在Ⅰ』，pp .15 - 34 .(2000年3月)
- ③ 西洋古典文学における魔女の原型（上）
名古屋経済大学・市邨学園短大人文学研究会「人文科学論集」第65号，pp 31 - 40 (2000年3月)
- ④ 古代ギリシア文学とりわけ叙事詩と悲劇における女性像
文部省科学研究費基盤研究(C)研究成果報告書，pp .1 - 57 .(1999年3月)

- ⑤ 『オデュッセイア』のキルケの段
日本西洋古典学会「西洋古典学研究」第45号，pp 40 - 49 .(1997年3月)
- ⑥ ギリシア型神話と「女性嫌悪」
『ユリイカ』(青土社) 第29巻第2号，pp 81 - 87 .(1997年2月)

(2) 川津 雅江

- ① 感受性のジレンマ　メアリ・ウルストンクラフトの『女性の虐待』
川津雅江・玉崎紀子他，『恋愛・結婚・友情　アフラ・ベーンからハリエット・マーティノーまで』(英宝社)，pp .71 - 102 .(2000年11月)
- ② Wollstonecraft's Politicized Landscapes in Scandinavia
日本英文学会雑誌 *Studies in English Literature English Number 2000*，pp 37 - 53 (2000年3月)
- ③ 「私」を売る女　パーディタとメアリ・ロビンソン
村田薫・森田典正編，『マージナリア　隠れた文学/隠された文学』(音羽書房鶴見書店)，pp 266 - 88 .(1999年3月)
- ④ “Self and Society: Wollstonecraft's Dilemma in The Wrongs of Woman”
イギリスロマン派学会編，*Centre and Circumference: Essays in English* (桐原書店)，pp 638 - 53 .(1995年5月)